

DMAT報告

全体

橋本市民病院DMATは、能登半島地震の際に石川県で活動しました。第一隊の活動では、自衛隊ヘリの搭乗者の搬送を担当し、石川県庁内の本部で搬送指揮を行いました。第二隊の活動では、金沢市内の医療機関の病床不足による問題に対応し、避難所での医療提供や患者の搬送を行いました。

【第一隊の活動内容】 1月15日～1月21日

第一隊は石川県庁内に設置された金沢以南保健医療福祉調整本部にて搬送指揮班として活動しました。当時の状況は災害亜急性期に入り、緊急処置が必要な方々の対応というよりは慢性疾患を持つ高齢者などをより環境の整った金沢市へ1.5次避難を行って頂くために自衛隊ヘリや救急車、マイクロバスなどで大量輸送が始められている状況でした。しかし、救急車の数が不足していたため、他の病院支援チームと協力して臨時チームを結成し、搬送を行うとともに、乗用車やワゴン車による要介護者の搬送も行いました。大型輸送ヘリでは、一度に15人以上の要介護者を搬送することもありました。受け入れ先の病院の選定も行いましたが、金沢市の医療体制が逼迫していたため、南加賀や県外への搬送が急務でした。私たちは被災者と直接接する機会はありませんでしたが、安全な場所へ円滑に避難できるように役割を果たしました。



【第二隊の活動内容】 1月26日～1月29日

第二隊の活動は、地震発生後約1ヶ月が経過した時期でした。この時期は、急性期から慢性期の医療や介護に変わる過渡期で、金沢市は被害が比較的少なかったため、半島被災地から要介護の高齢者を市内の医療機関に多く受け入れることとなり、病床が不足し、一般の救急入院が滞る問題が発生しました。そのため、石川県が主体となり、市内に大規模な避難所が設置され、療養先が決まらない入院患者を毎日一定人数収容することになりました。第二隊は、その搬送の指揮や本部の責任者として、多くの組織と連携し、避難所内での医療提供の仕組みを構築し、現地への引継ぎにも関わりました。



まとめ

南海トラフ地震について、和歌山県でも同様の状況が発生することが懸念されます。橋本は被害が比較的軽度である可能性がありますが、多数の傷病者を受け入れる那賀・橋本医療圏ではニーズとキャパシティのミスマッチが生じ、平時の医療体制にも影響が出ると予測されます。災害医療の目的は「防ぎ得た死を減らす」ことです。この目的を達成するためには、平時からの準備が必要だと再確認しました。

今回の活動を通じて、私たちはチームとして、個人として貴重な経験をしました。能登半島地震の教訓を踏まえ、当院及び当地域での災害対策を改善し、災害拠点病院としての役割に取り組んでいきたいと思っております。この度の派遣にご協力いただいた皆様に心から感謝申し上げます。

DMAT 看護師 丸 勇真
DMAT 業務調整員 上中居 幹太